



TITLE:

# <大會抄録>清代中期の冒捐冒考問題

AUTHOR(S):

岸本, 美緒

---

CITATION:

岸本, 美緒. <大會抄録>清代中期の冒捐冒考問題. 東洋史研究 2001, 60(3): 563-564

ISSUE DATE:

2001-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155387>

RIGHT:

を税として納めることが課せられていた。その後、弓の需要が低下し、時代の経過とともに「ヤイジュ」という名稱は、より發音しやすい「ヤーシュ」へ變化したと考えられる。經濟活動の觀點から彼らにとってじゅうたん製造および畜産業もまた重要な位置を占めていた。ところが一九世紀中葉、彼らのうちの數家族は農業に従事しており、彼らがじょじょに定住化の過程を歩んでいったことが明らかにされた。一九世紀後半には強制的定住をよぎなくされたが、今日もなお彼らは天然染料を用いてじゅうたんを家の中で織り續けている。

### アンディジャン蜂起再考

小松久男

アンディジャン蜂起は、一八九八年五月一八日未明、フェルガナ地方東部のムスリム約二千名が、ナクシュバンディー教團の導師ドゥクチ・イシャーンの指揮下にアンディジャン駐屯のロシア軍に攻撃をかけた事件として知られている。報告者は、かつてこの事件について論文を發表する機會を得たが（『アンディジャン蜂起とイシャー』、『東洋史研究』第四四卷第四號、一九八六年）、ソ連時代の制約のために利用することのできた史料には限りがあった。しかし、ペレストロイカ以後の激變の中で研究環境は大きく改善され、現地の研究者との意見交換はもとより、史料の可能性も開かれた。この蜂起について言えば、ドゥクチ・イシャーンの自筆本とされる

『思慮なき者への訓戒』、彼のおびただしい奇蹟に關する傳承を集めた寫本、また同時代のムスリム知識人の著したフェルガナ史などの史料が利用可能となっている。これらの史料は、これまで不明であったドゥクチ・イシャーンの思想と活動、さらに彼の教團の實態について多くの手がかりを與えてくれる。一方、ロシアに對するジハードという彼の行動については、同時代から相反する評價があったが、この問題は蜂起から一世紀を経た現代においても傳統的なハナフィー派ウラマーとイスラーム復興主義者との間の争點となっている。今回の報告では舊稿の不足を補うとともに、この蜂起を中央アジアにおける再イスラーム化という視點から再考してみた。

### 清代中期の冒捐冒考問題

岸本美緒

清代中期の乾隆三〇（一七六五）年前後より、中國各地で冒捐冒考問題即ち捐納や應試の資格をめぐる訴訟や紛争が頻發したことを背景に、報捐應試を許される者と禁じられる者との範圍に關して、禮部を中心に、問題となる個別事例に即した論議が積み重ねられた。その結果、同じく衙門で應役する人々のなかでも、庫丁・斗級・民壯は報捐應試してもよいが、馬快や門子・弓兵等はいけな

い、というように、細かい規定が作られてくる。それらの規定は、例えば嘉慶一七（一八一二）年の『欽定學政全書』卷四三「區別流品」のなかにまとめて見ることができる。では、どのような人々

が、どのような基準によって、報捐應試して官僚・士人への道をたどることのできない「汚賤」な者と見なされたのか。その基準は必ずしも明快に示されているわけではないが、各事例における論議の筋道をたどるなかで、當時の人々に共有された良賤區分の論理をさぐることができよう。

本報告では、第一に、地方における冒捐冒考紛争がどのようにして『學政全書』や『大清會典』の規定を生み出していったのか、その具體的な過程を検討する。第二に、「賤」の觀念をめぐる地方社會と中央政府のずれも含め、當時における「賤」觀念の核心と幅について考察する。さらに、中國の良賤制度の歴史のなかで、このような清代中期の事態をどのように位置づけるべきか、若干の見通しを示してみたい。

## 戰國時代の尖足布・方足布の性格について

江 村 治 樹

尖足布、方足布と呼ばれる形式の青銅貨幣は、中國の戰國時代、三晉地域を中心に流通したと考えられる貨幣である。これらの貨幣には、ほとんど例外なく地名が鑄込まれており、その地名の種類も多数にのぼる。そして、それらの地名は文獻史料にあらわれる三晉地域の都市名と一致するものがかなり見られ、これらの貨幣と都市との關係が想定される。これらの貨幣は、三晉地域の都市の性格を考える上で貴重な材料と言うことができる。

これらの貨幣と都市との關係を考える場合、まず第一に、貨幣がはたして地名が鑄込まれた都市で鑄造、發行されたものなのかを確認する必要がある。そしてその上で、發行主體がどこにあったのかを明らかにする必要がある。しかし、既存の文獻史料には三晉地域に係わる貨幣の記述は見られず、もちろん尖足布、方足布の存在や流通を示す記載も一切見られない。したがって、これらの貨幣の發行主體や都市との關係を考えるには、尖足布、方足布という實物資料そのものからのアプローチによらざるをえない。そこで、實物資料を用いて次の四つの側面から、以上の問題を解明するための初步的検討を加えたい。

一、貨幣に鑄込まれた地名と文獻史料の地名、それに對應する都市遺跡との關係の検討。

二、貨幣の出土地と貨幣の地名との關係の検討。

三、同一地名の貨幣の文字と形態の検討。

四、貨幣の鑄型の出土地の検討。

バーミアン石窟と彌勒信仰

小 谷 仲 男

一九七九年の舊ソ連軍の侵攻とともに始まったアフガニスタンの内戦は現在に至っても終わらない。内戦は多くのアフガン難民を流出させたばかりでなく、アフガニスタンの貴重な世界的文化財を破壊しつつある。二〇〇一年三月のバーミアン大佛の爆破は世界を